はじめに

『一橋大学スポーツ研究』は、われわれ「スポーツ科学研究室」の年 2 回の研究合宿、年 4 回程度の研究会の成果として、毎年、発行されている。先行する紀要『研究年報』が最初に刊行されたのは 1982 年であり、そこからカウントして、本誌は 31 号となった。1 号発刊当時の共同研究を知る諸先輩方は既に退職され、世代交代が進む中、この数年で平均年齢もずいぶんと若返った。しかしながら、これまでと同様に研究会や研究合宿を行い、スポーツをめぐる社会現象やスポーツと社会の関係などについて議論を積み重ねている。

今号は、文部科学省科学研究費助成金「グローバル化する社会におけるスポーツと格差・不平等に関する総合的研究」に基づき、「スポーツの諸相へのアプローチ」をテーマとしている。寄せられた論考を見ていただければお解りのように、「地域づくり」、「武道」、「部活動」、「ナショナリズム」、「ジェンダー」、「社会運動」、「マイノリティ」、「地域スポーツ」、「身体文化」、「障害のある人のスポーツ」と、一口に「スポーツ」といっても、さまざまな側面に対して、さまざまなアプローチが存在する。それぞれの研究者は、独自の対象を明確に捕捉するべく、また、独自の方法論を確立するべく日々研究活動を行っている。そして、それらの成果を発表する研究会の場では、異なる視点どうしが多面的に交差し、「スポーツ」や「グローバリゼーション」、「格差・不平等」といった共通する対象を浮かび上がらせることになっていると確信する。

ところで、本号には 2 人の大学院生（社会学研究科・研究会での報告者）から寄せられた論文を掲載している。われわれの教育・研究体制の中から若手の研究者が育ってくれていることを非常に嬉しく思うと同時に、彼らがもたらす新たなる視点や研究への情熱は、少し前を歩む者にとっても大きな刺激を与えてくれるものである。ここでの発表を契機として、ますます成果を積み重ねてくれることを期待する。

閉幕したばかりのオリンピック・パラリンピックのロンドン大会は、ソーシャル・メディア（twitter や Facebook）の普及後初の大会として「ソーシャリンピック」とまで言われたが、期間中、これらの新しいメディアを通じて感動を世界中の人々と共有した者は多かったのではないだろうか。このことが示すように、スポーツは世界の人々を強く結びつける媒体となる。同様に、スポーツという研究テーマも、さまざまな側面、さまざまなアプローチを持つがゆえに人々を結びつけるのである。

本誌が、学外・学内の活発な研究交流を創出し、スポーツ研究に大きく貢献することを切に願っている。

2012 年 9 月 21 日　　一橋大学スポーツ科学研究室室長　岡本　純也